18　「物語集」─中古の説話集

20年度　中央大学

★　次の文章は、平安時代の女房、赤染衛門についての説話である。これを読んで後の問に答えよ。

　今は昔、がは、といひける人の娘なり。その腹にをば産ませたるなり。その挙周勢長じて、⑴文章の道にやむごとなかりければ、公に仕うまつりてにになりにけり。

　その国に⑵下りけるに母の赤染をも具して行きたりけるに、挙周思ひかけず身に病を受けて日頃わづらひけるに、重くなりにければ母の赤染嘆き悲しんで、思ひやる方なかりければ、にを奉らしめて挙周が病を祈りけるに、その御幣の串に書きつけて奉りたりける、

　　⑶かはらむと思ふ命は惜しからでさても⑷別れむほどぞ悲しき

と。その夜、遂に癒えにけり。

　また、この挙周が望みける時に、母の赤染、にかくなむ詠みて奉りたりける、

　　思へきみの雪をうち払ひ消えぬさきにと⑸急ぐ心を

と。この歌を御覧じて、⑹いみじくあはれがらせたまひて、かく和泉守には⑺なさせたまへるなりけり。

　また、この赤染、夫の匡衡がのが娘を語らひて愛し思ひける間、赤染がもとに久しく来たらざりければ、赤染かくなむ詠みて、稲荷の禰宜が家に匡衡がありける時にやりける、

　　⑻わがやどのまつはしるしもなかりけり杉むらならば⑼訪ね来なまし

と。匡衡これを見て「恥づかし」とや思ひけむ、赤染がもとに返りてなむ住みて、稲荷の禰宜がもとには通はずなりにけり、となむ語り伝へたるとや。

注　大江匡衡……文章博士などを歴任した文人。

鷹司殿……藤原道長の正妻、倫子。

御堂……藤原道長。

稲荷……伏見稲荷大社。

わがやどの……「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（古今和歌集）を踏まえた歌。

問１　傍線⑴⑷⑹⑼の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中からそれぞれ選べ。

⑴　「文章の道にやむごとなかりければ」

　　Ａ　学問の道に励む志が高かったので

　　Ｂ　学者としては身分が高かったので

　　Ｃ　漢学にたいへんすぐれていたので

　　Ｄ　和歌の才能がすばらしかったので

⑷　「別れむほどぞ悲しき」

　　Ａ　息子のために匡衡と別れたことが悲しい

　　Ｂ　自分が死んで息子と別れることが悲しい

　　Ｃ　息子が自分よりも先に死ぬことが悲しい

　　Ｄ　自分がかわりに病気になることが悲しい

⑹　「いみじくあはれがらせたまひて」

　　Ａ　たいへん感動なさって

　　Ｂ　とても悲しくなられて

　　Ｃ　ひどく残念に思われて

　　Ｄ　はげしく苦悩なされて

⑼　「訪ね来なまし」

　　Ａ　訪ねて来るにちがいないよ

　　Ｂ　訪ねて来ることはないよ

　　Ｃ　訪ねて来たらいいのに

　　Ｄ　訪ねて来ただろうに

問２　傍線⑵⑶⑺の主語としてもっとも適当なものを、左の中からそれぞれ選べ。

Ａ　赤染　　Ｂ　匡衡　　Ｃ　挙周　　Ｄ　鷹司殿　　Ｅ　御堂

⑵＝〔　　　〕　　⑶＝〔　　　〕　　⑺＝〔　　　〕

問３　傍線⑸「急ぐ心」の説明として、もっとも適当なものを左の中から選べ。

Ａ　人生は雪のようにはかないので来世に備えようとする気持ち

Ｂ　子どもの任官がむずかしいことを知りつつ抗おうとする気持ち

Ｃ　子どものためなら自分が死んでもかまわないと思いつめる気持ち

Ｄ　老い先短い身でありながらも鷹司殿に奉公したいと思う気持ち

Ｅ　自分が生きているうちに子どもの任官を見たいと願う気持ち

問４　傍線⑻の中には掛詞がある。掛けられている言葉を漢字を用いて書き分けて答えよ。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　　　］

◎問５　この説話は三つの話で構成されている。この三つの話に共通する主題は何か、五字以内で答えよ。

　　［　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　⑴＝Ｃ　⑷＝Ｂ　⑹＝Ａ　⑼＝Ｄ

問２　⑵＝Ｃ　⑶＝Ａ　⑺＝Ｅ

問３　Ｅ

問４　松　と　待つ

問５　和歌の功徳

【現代語訳】

　今となっては昔のことだが、大江匡衡の妻は、赤染時望といった人の娘である。（匡衡は）その人に挙周を産ませたのである。その挙周が成長して、漢学にたいへんすぐれていたので、朝廷にお仕えしてとうとう和泉守になった。

　その（和泉）国に（挙周が）下ったときに母の赤染をも伴って行ったが、挙周は思いがけず病にかかって数日間苦しんだが、重篤な状態になってしまったので母の赤染が嘆き悲しんで、思いを晴らすすべもなかったので、住吉明神に御幣を奉献させて挙周の病（の治癒）を祈ったが、その御幣の玉串に書きつけて献上した（和歌は）、

　（子の命に）代わろうと思う私の命は惜しくはないが、そのために自分が死んで息子と別れることが悲しい。

と（いうものであった）。その夜、とうとう（挙周の病が）治癒した。

　また、この挙周が（ある）官職を望んだときに、母の赤染が、鷹司殿にこのように詠んで差し上げた（和歌は）、

　わが君よどうぞおくみ取りください。頭に積もる雪を打ち払ってその雪が消えるまでのわずかな時間に等しいほど老い先短い、白髪頭の私の命が消える前に（わが子がなんとか早く官を得てほしい）と焦る親心を。

と（いうものであった）。御堂（＝道長）がこの歌をご覧になって、たいへん感動なさって、このように和泉守には（御堂が）任官させなさったのだなあ。

　また、この赤染は、夫の匡衡が伏見稲荷大社の禰宜の娘と親しく付き合って愛しく思っていた間、赤染のところに長い間やって来なかったので、赤染がこのように詠んで、稲荷の禰宜の家に匡衡がいたときに届けた（和歌は）、

　どのようにわたくしがお待ちしていても、わが家の松にはあなたを引きつける力はないことですね。（松でなく、いとしい方のおられる稲荷の社にたくさん植わっている）杉叢ならば、（あなたはいそいそと）訪ねて来ただろうに。

と（いうものであった）。匡衡はこの歌を見て「（我が身を恥じるほど）立派（な歌）だ」と思ったのだろうか、赤染のところに戻って住んで、稲荷の禰宜（の娘）のところには通わなくなってしまった、と語り伝えているということだ。